（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　杉下（すぎした）　元明（もとあき）

本論文は、江戸前期から明治に至る漢詩史を、各時期の漢詩は前代から何を受け継ぎ、また逆に何が変わっていったのかという観点に立ちつつ、詳細に検討したものである。構成は、序章に「山を詠む詩」の論考を掲げ、第一部「元禄～享保の漢詩文―木門を中心に」には「祇園南海の詩作と推敲」等６編、第二部「江戸後期漢詩文の諸相」には「赤城の霞―江戸中・後期の漢詩概観」等６編、第三部「漢詩表現が俗文藝にあたえた影響」には「蒹葭水暗蛍知夜―中世以前の漢詩受容について」等５編、第四部「幕末から近代へ」には「ナポレオンを詠む詩」等５編の論考をそれぞれ収め、巻末に「木下順庵年譜稿」を付載する。

序章では、山を題材にして詠んだ漢詩を例に取りながら、元禄から享保にかけて江戸漢詩には大きな転機があったことを指摘し、あわせて江戸漢詩の時期区分についても触れる。

第一部では、18 世紀前半までの江戸漢詩の特質を、木門（木下順庵門）の詩人達を中心に据えて詳細に検討する。祇園南海の詩集により南海十代の詩作の実態を解明し、新井白石の詩評を分析して彼らが韻律にも見識を持ち、一般には荻生徂徠の提唱とされる古文辞学にすでに関心があったことを指摘するなど、従前の研究を大幅に前進させている。また、この期の漢詩の朝鮮や清との深い関係、俳諧等の俗文学との交渉を明らかにする。

第二部では、18 世紀後半から 19 世紀前半の江戸漢詩が、前代の漢詩にすでに見られた特色を、どのように継承・発展させていったかを論じる。俗文学との交渉については、この時期の漢詩に頻出する「美人」の語が、同時期の俳諧にも数多く見出されること、庶民的とされる一茶の俳諧にも『詩経』の顕著な影響があること等を、具体例に基づき丁寧に論証する。また、海外との交流については、松村梅岡の『梅岡詠物詩』を例に、この時期に日本と中国の漢詩人の間の交流が一層進んだことを明らかにする。

第三部では、中国漢詩の著名な詩句が江戸の俗文学にどのように取り入れられているかを、豊富な挙例により詳細に検証する。『古文真宝』『唐詩選』『三体詩』『詩経』等々の漢詩中の詩句が、狂詩、俳諧、狂歌はもとより、浮世草子、談義本、浄瑠璃、噺本等にまで引用されることを指摘し、中国漢詩が江戸の俗文学に与えた影響の大きさを確認する。

第四部では、江戸漢詩が近代文学にどう継承されたかを論ずる。斎藤竹堂の「外国詠史」を中心に、漢詩が西洋の歴史を詠むまでに素材を広げた様子を詳述し、また成島柳北における漢詩文の意味を検討して、彼には漢詩が随筆や日記の役割を果たしたことを指摘する。さらに、夭折した中野逍遙の恋愛詩が、島崎藤村の新体詩等に強く影響していることを論証して、江戸漢詩と近代詩歌に連続性があることを指摘する。

巻末の木下順庵の年譜は、今後、遅れがちな木門全体の研究に資する詳細な年譜である。

従来の江戸漢詩研究が、各時期における詩風の相違のみをもっぱら問題としてきたのに対し、本論文ではそれに加え、前代からの連続性を重視する視座を併せ持つことにより、詩風の変遷についての分析を、正確かつ立体的にした点が卓抜である。また、漢詩と散文を含めた他ジャンルとの交渉を、資料を博捜して丹念に検討することにより、江戸時代文学中に占める漢詩の意義を明らかにしたところに、極めて大きな意義がある。中国の漢詩との関係など、今後また検討を重ねてゆく余地のある箇所もあるが、それはむしろ本論文の成果によって明らかになった課題であり、本論文の価値を損じるものではない。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。